



どんぐり達の輝き(前編)

—山麓南町図書館物語—

瑞貴くぬぎ



修理を教わり始めてしばらく経つ。仕事の合間に、若菜さんと二人で時間を取る事が出来る時だけの話なので、あまり進んではない。

「今日は糸綴じを覚えてみようか」

若菜さんは、ダンボール箱に入れられた修理本の中から糸綴じの物を二冊選び出し、一冊を僕の前に、もう一冊を自分の前に用意した。

今二人のいるのは職員の休憩室。

建物の東側に面しているそこは、晴れた午前中は特に明るい。

図書館の周りは主に水田だ。黄金色となった稲穂はすでに重たげに頭を垂れ、刈り取られるのを待つばかりとなっている。

その向こうの堤防の草にも、枯色が目立つようになって来た。

向かい合って座ると、彼女は修理キットのケースを長机の真ん中に置いた。

寒冷紗や花布の切れ端、針や糸、はさみなどの裁縫用具をひとまとめ。さらにカッターや木工ボンド、小型のこぎりからメンディングテープなど、家庭科の授業と図工の授業とを合わせたような一式が収められている。

小さいながら、意外と多岐にわたる作業だ。

針は普通の縫い針とは違い、カーブを描くよう曲げられた物を使う。普通に売られてもいる針だという。どんな使い道がある物なのだろう。

糸綴じ本とは本の作り方の名称だ。多くの本がこの形で作られているが、糸で綴られた部分は背表紙で隠されているので、利用者の方がそれを認識する事はほとんどない。

「表紙を切り離す所から始めるよ」

若菜さんが取り掛かったのは芝木好子のエッセイ集、そして僕が手渡されたのは古い絵本、宮沢賢治の『どんぐりと山猫』だ。

表紙と本体とを切り離すと、本体の背に張られた寒冷紗などを手順で外して行く。

『どんぐりと山猫』は八枚を二つに折った十六頁の綴りを幾つも重ねて一冊に製本されていた。

「じゃあ全部の糸を抜いて」

「傷んでいない無事な所も？」

「うん。全部を一本の糸でかがるようになるから、残さず全部」

六十頁に満たない僕の『どんぐりと山猫』などと比べて、若菜さんの手にしているエッセイ集の仕事はすっと大変なものと分かる。

「かがり方は説明するより見てもらった方が分かり易いと思うから、私の真似をして」

彼女は本を僕の方に差し出すような姿勢で針を操り、頁をかがって行く。それを僕はなぞりながら、手元の針を動かす。

「特に難しくはないでしょう？」

「でも、簡単でもないです」

「要は慣れね」

ひと折り目をかがり終えた頃、澤口さんが顔を覗かせた。

「どんな様子？」

「あ、カウンター忙しかったりします？」

「呼びに来た訳じゃないから。私が休憩」

彼女は棚から自分のカップを取り出すと電気ポットのお湯でインスタントのコーヒーを淹れ、お菓子箱がさがさとかき回しプレートのバタークッキーを選び出すと、ちょこんと若菜さんの横に座った。

「お偉いさん達の視察が終わったの。ひと段落」

今朝は教育委員会の視察が入っていた。特に何をする訳でもなく、館内を見て回るだけだから、気にせず修理をやっていると計らってくれたのが澤口さんだ。

「彼はどう？」

クッキーを個装袋のまま四つに砕き、それから開封すると、一かけらを口に入れながらコーヒーを含む。

若菜さんにそういう事を尋ねても、いつも曖昧な言葉ではぐらかしてしまうのに……

そんな事を考えていると

「優秀よ。裁縫とか得意かも」

思いがけない言葉に驚かされた。

「へえ、頼もしいね」

「うん」

「修理要員は貴重だからね。萩君頑張って」

「その貴重な修理要員って、随時募集中なんですけど」

恨めし気な口調の若菜さんなのだが

「萩君、頑張ってね！」

澤口さんは、二かけら目のクッキーを頬張りながらにこりとこちらに微笑んでみせた。

それから「何の本を直しているの？」と、僕の横に開いたまま置かれた表紙を手にとると、ひっくり返して書名を確かめる。

「ふーん。宮沢賢治……金色のどんぐりのお話ね」

「読みました？」

「うん。子供の時。今日、午後から来るよ、どんぐり達。そしたら忙しくなるからね」

「子供？」

若菜さんが訊く。

「うん。体験学習だって。東小の四年生ひとクラス。総勢三十二名」

到着時刻は十四時くらいの予定という。時計を見ると、今が十時半。

十二時から順次お昼を食べにここに職員が出入りするようになる。

「まだ大丈夫。ゆっくりやっていて」

カップをさっと濯ぎ、棚に戻すと、澤口さんは仕事に戻って行った。

曲がった針を向きを整えながら通すという作業に、手がまだ違和感を感じている。

それでも三つ折り目にかかる

「進んだね、大分」

若菜さんが横から覗き込み、出来栄を確かめる。

「金色のどんぐり達か……午後は賑やかになるかな？」

「このお話ほどには」

かがり作業を続けながら、絵本を見やると

「さすがにそんなでは困る」

『どんぐりと山猫』の物語は一郎という少年に一枚のはがきが届く所から始まる。

はがきの送り主は山猫。「面倒な裁判があるから来て欲しい」という依頼の内容だ。

一郎が森の中の山猫の元へ行くと、金色のどんぐり達が「だれが一番えらいのか」でもめ続けている事を聞かされる。

「頭のとがってるのがえらい」

「まるいのがえらい」

「大きいのがえらい」

三百でもきかない程の沢山の金色のどんぐり達がめいめいに勝手を言い、自分が一番えらいと主張する。判事の山猫は埒のあかない事に手を焼きながら、騒動を鎮めようとしている。

「しずまれ！しずまれ！」

馬車別当が鞭を鳴らす。すると、その時一瞬は静かになるものの、たちまち同じ喧騒は沸き起こる。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」と尋ねる山猫に一郎は笑ってこたえる。

「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ばくお説教できいたんです。」

どんぐり達の騒ぎは収まる。

一郎は黄金のどんぐり一升をお礼に受け取る。馬車で自宅まで送られる一郎だが、黄金色のどんぐりは、

到着する頃には輝きは消え、ただのどんぐりに変わっている。……そんなあらずじだ。

「萩君は覚えている？二日間進展のない裁判を終え、一郎の呼ばれたのは、三日目の朝からだたって事」
若菜さんが裁判の流れをさらう。九月十九日付のはがきで、一郎は「めんどな裁判」に呼ばれ、解決の良
い考えはないかと求められるのだが、たしかにそれは裁判が始まって三日目の事とされている。

「でも山猫は言っているんだよ。『まいとしこの裁判で苦しみます』って。なら過去の判例ってどうなってい
るんだろう？」

過去の判例…？

「毎年同じ裁判をやっている。だったら、その時解決した方法で今年も解決出来るんじゃないの？なのに何
故また二日間同じ問答を繰り返して、三日目に一郎を呼んだりしたんだろう」

もっとな疑問だ。彼らは毎年同じ裁判をやっていた。なのに山猫のやっている事と言ったら
「いい加減仲なおりしたらどうだ」

を繰り返し

「しずまれ！しずまれ！」

と怒鳴りたて、馬車別当が鞭をふるう……これが続いているだけなのだ。

「揚げ足取りに思える？」

彼女は真っ直ぐな目で僕を向く。

「いえ……」

もし学校でならそういう質問は好ましくもないかも知れない。彼女の言う通り、揚げ足を取ろうとしている

ように思われそうだ。

宮沢賢治の作品のほとんどは彼の死後に世の中に送り出されている。そのために未完成の部分や原稿の失われた部分などが、そのままに存在する。

けれど、『どんぐりと山猫』は『注文のおいしい料理店』などと共に生前に出版されている作品だ。

描写の一つ一つは、賢治の思いの結晶の筈だ。

「大切な部分だと思います。それって『なぜ一郎をはがきで呼んだのか』にも掛かってくる話ですから」

「よかった、ちゃんと聞いて貰えた」

「一度、まとめさせて下さい」

「うん……ありがとう」

気が付くと、机の上がいろいろと散らかっている。いつの間にこんなに広げてしまったものか。

「片付けようか」

「はい」

まだ縫いかけの、ばらばらの本に輪ゴムを掛け、箱に収める。

「夕方続きが出来なかったら、また明日」

カウンターに着くと木崎さんがヘルプに入ってくれていた。

澤口さん、田神さんとで三人体制となっている。

「やっぱり忙しかったんじゃないですか？ すいません」

みんなに謝ると、

「そうじゃない。午後の東小が入った時の用意で早目に呼ばれたんだ」

木崎さんは仕事の手を止めないまま、目だけでこちらを見る。

「それに、萩君に修理について勉強しろと言ったのは俺だったしな」

子供たちが来る前に昼飯食べて来る、しばらくここをよろしくと立ち上がった木崎さんは

「東小の子供が来ている間はキッズルームの立ち入りを禁止にするから」

と言い足し、休憩室に向かった。

キッズルームとは言葉の通り、小さな子供の為の部屋だ。

児童書室の突き当りに、陽当たりの良い、カーペットの敷かれた小部屋が設けられている。未就学児と、そのお母さんが靴を脱いでここに上がり、本を開く事が出来るようにという部屋だ。

お話会の時によく使われる大判絵本などもここに置かれている。

入口は右端と左端の二箇所。特に戸は付けられていない。見るとそのどちらにも「今日は立ち入り禁止」と書かれたホワイトボードが立てられている。

単に「本日立入禁止」とは書かない事で言い回しが柔らかい。文字は田神さんのものだろうか。

東小の児童が到着したのは予定通りの十四時だった。

同伴している男性教師がクラス担任なのだろう。四十代半ばといった所か。

必要があれば館内の説明もいたしますと申し出るが、それには及ばないとの事だった。

カウンター前を二列になり歩いて行く三十二名は、整然とした蟻の列のように児童書室に吸い込まれた。

「静か」

「うん。ちょっと意外」

「今時の子ってこうなの？」

イメージとは随分違うその様子に、皆の口から感想が漏れる。

事前に貰っていた資料を基に、必要分の貸出カードが用意されている。

「既に貸出カードを持っているという先生と児童八名分を抜き、二四名分をお作りしてあります。ご確認ください」

担任の後を追ひ、沿うように歩きながら声を掛けた木崎さんは、教師が立ち止まり、正面に向いた時、表情がこわばった。

それは担任も同じだったらしい。顔を見、首に掛けられたネームプレートの名を確認した彼の

「お前…木崎か」

と言うその言葉に、親しみ、あるいは懐かしさといった空気は微塵も感じられなかった。

「そうか、図書館職員か」

手を伸ばし、貸出カードを受け取りながら浮かべた笑いにも、目つきにも、皮肉を含んだ陰悪な空気が漂う。

「お知り合いですか？」

戻った木崎さんに尋ねると

「昔の担任だ」

懐かしくなさそうなのは木崎さんも同じだ。

「東小だったんですか？」

「俺は西小」

木崎さんの元担任では随分経っているだろう。異動しているのは当たり前だ。

児童書室には三十二人分の静かな足音と、ささやき声が漂う。

「さあ、どんどん決めろよ。借りる本が決まったら俺の所に来い。貸出カードを渡すから」

担任の声がおよそ図書館らしくなく大きく響く。

「図鑑や絵本はダメだぞ。読み物だ。ちゃんと考えろ」

声は一階全体に響く。一体何事かと、一般の来館者が体を傾げながら児童書室を覗き込んで行く。

「あの教師、場所をわきまえろつての」

田神さんが睨みつける。

「野呂という奴です。昔から全然変わらない」

「ガラが悪いね」

「のら先生と呼ばれていました」

「あたしが保健所に届けてやるよ」

小気味よく、物騒な申し出を口にする。

「俺、そろそろ館内巡回して来ます」

「巡回はいいけどさ……」

田神さんはくいと顎で野呂先生の方をしゃくり上げて見せると

「あの騒がしいの、どうする？」

教師はまだ様々な言葉で児童を背ついている。

あんなに言われては余計に本を選び難い。図書館の静けさを楽しませてあげる気持ちは持てないものだろうか。

「折りを見て、一言入れて来ます」

「喧嘩しない程度にね」

冗談めかした口調を作る田神さんだが、その空気を受け止める様子もなく、木崎さんは無言でカウンターを離れた。出来る事なら面と向かいたくないのは、誰よりも木崎さんなのだ。

児童書室にまず入った木崎さんは、子供たちを避けながら、通路、書架の本などに目を配り歩く。人数が多い分、落し物、本の乱れなどに注意が必要な筈だ。

ホワイトボードで入口を塞いであるキッズルームには、左手入口から靴を脱いで入って行った。

ふと見ると右側のホワイトボードが動かされている。入口を塞ぐ形に置かれていた物が、人が通れる程度に斜めにされているのだ。誰かが入ったのだろうか？

僕のいるカウンターからでは、数名の女子児童が入口辺りを塞いでいて、中の様子が分からない。

「田神さん、あのホワイトボード」

田神さんも「本当だ」と気付く

「誰か入ったのかな？土足だとやだな」

やはり心配はそこだ。

ホワイトボードは木崎さんが直してくれるだろう。立ち入っている児童を見付けたなら、出るように促してもくれる筈だ。

だから、その木崎さんがボードをそのままにまた左の出入り口に戻り、靴を履いて館内巡回に戻ろうとした時には、カウンターから見ている皆が怪訝な面持ちとなった。

「僕、ちよつと見てきます」

立ち上がり、児童書室に向かう。

「ほら内山！ちよろちよろ動き回ってるな！どんどん本を決めろ！」

野呂先生は相変わらずだ。

当面の問題はまずここからだろう。僕は先生に近付いた。

「あの、先程から随分大きな声を出されていますけど、少しお静かに願えませんか？他の利用者さんの迷惑になります」

教師は振り返り、僕に目を向けた。頭から足元まで目を通すと、何も言わないまま向きを戻し、何も聞かなかったかのように

「ほら内山！聞いているのか！」

なるほど、そういう流儀ですか。

そもそも児童たちは皆おとなしい。イライラする理由も見当たらない。おかしいのは教師だけだ。

「先生、うちの職員の言葉が聞こえませんでしたか？」

声を発したのはキッズルームから戻った木崎さんだった。

教師は、明らかに僕に対する時とは違う強い敵意で木崎さんを睨んだ。

「俺はこいつらの教師としてここにいるんだ。指図を受ける筋合いはない」

一体どうするとかこの的を外した反論が出来るのだろうか？が、言った本人は平然たるものだ。

「静かにして頂けないのであれば、退出をお願いする事になります」

教師はもはや木崎さんを見ようとしなかった。

「体験学習中の監督教師を、図書館職員が追い出せるのか？出来もしない事言うなよ。お前は昔からそうだった」

声がぐぐもった。低くためた分だけ、そこに本心が込められたようだった。

不意にその教師の背中で『ドン』と音がした。

教師が振り返ると、一人の男子児童が立っていた。背の低い、良く日焼けした子だ。音はその子が教師の背中を叩いた音だった。

いたずらな目がクリクリと教師を見上げ『につ』と笑うと大きな前歯が白い。

「何だ、望月！」

望月と呼んだその子の方へ教師は向きを変えた。

望月君は数歩後ずさった。

「うん？」

教師が掴もうと手を伸ばすと、間合いを計ってまた数歩下がる。

「ふざけるな！」

望月君は背中を向け、一気に逃げ出し、その後を教師が飛びかかるように追い掛けた。

望月君は、入口に立つ数名の女子の間をすり抜けるようにキッズルームに転がり込んで、走った。

「待て！」

教師が後に続くと、女子児童はすっと体を動かし、通道を開けた。

そして、キッズルームに飛び込んだ瞬間、奇妙にバランスを崩し、体をよろめかせた。同時に右手にあったホワイトボードが傾いたかと思うと、教師の上に強く倒れ込んだ。

ガシャンと大きな音が響き、ボードは教師の体の上に重なった。教師は、ハエ叩きで潰されたゴキブリだった。

キッズルームの入口に殺到した児童たちは何が起こったものかと盛んに中を覗こうとするものの、教師を助け起こそうとする子は一人もいなかった。

彼は自力で這い出し、周囲を見回し、

「何だこれは！」

図書館中に響いたのではないかという叫び声を上げた。

木崎さんがホワイトボードを起こした。

「お前ら何をした！ どういうつもりだ！」

興奮しながら児童たちに叫び続けていたが、入口近くで自分を眺める児童の中に望月君の姿を認めると、
「望月！」

飛び掛かるようにその子の元へ向かおうとする二人の間に、木崎さんが立ち塞がった。

「いい加減にして下さい。これ以上大きな声を出すのなら、本当に退出して頂きます」

「邪魔だ」

その時には、僕がすでに木崎さんの横に並んでいた。さらに田神さん、澤口さんが後ろに付いていた。

「本当に退出させます」

木崎さんが繰り返した。

児童書室の入口には声に驚いた人達の人だかりがすでに出来ている。一般の方の立ち入りを制限はしていないのだが、この空気の中、ここまで来ようという人はいなかった。教師は様々な顔をあからさまに作ると、声を下げ

「望月、来い」

と命じた。望月君は動かなかった。緊張は伝わるものの、表情には笑顔が残されている。

「皆に、何があったか話してくださいませんか」

木崎さんの言葉に教師の顔が歪んだ。

「何が？見ていたろう。何か紐のような物がホワイトボードからこっち側に向かって張られていた。俺はそれに引っ掛かったんだよ」

なるほどと思う。あの奇妙な動きは紐に体を取られたものだったのだ。

けれど皆は顔を見合わせた。

「見た人はいいますか」

木崎さんの言葉に応える人はいなかった。

「お前らそこに立っていたらう！」

女子を指して声を荒げるものの、

「ずっと先生とこっちの人の話すのを見ていました」

そう言って、一人の女子児童が僕を指差した。

「お前……」

教師は僕の首から掛けられたネームプレートを見ながら

「オギ！」

「ハギです」

「どっちでもいい！」

「名前は大事だと思いますよ。のら先生」

思いがけない相手から、かつてのあだ名を呼ばれた野呂先生は、木崎さんを睨みつける。まるで意に介さないように、木崎さんはにやりとした笑いを浮かべて僕の方を見る。

田神さんがホワイトボードの前に立った。

「じゃあみんなこっちを見てくれるかなー。今先生の言っていたオギという漢字は、草かんむりの下にけもの辺を書いて、横に火を書きます。これで『萩』という漢字になります。で、こっちの人の名前はハギです。これは草かんむりの下にのぎ辺に火……秋という漢字ですね。これで『萩』という漢字になります。オギとハギ、どちらも植物の名前です。似てる漢字で学校の先生でも間違えちゃう人がいるくらいなので、皆さんも読み方に注意して下さい」

教師の恨めし気な顔は、ピークに達しようとしていた。

「ハギ！お前の向きなら見えたよな！」

僕は教師を見据え、黙ったままだった。

「何とか言えハギ！」

「随分失礼な人ですね」

「何だと！」

「はーい。皆ちよつといいかなー」

田神さんが再び自分に注意を引いた。

「初対面の相手の名前を呼ぶ時にいきなり呼び捨てにするような事は、普通ありません。子供同士なら、『君』とか『ちゃん』あと『さん』を付けたりします。大人同士の場合はたとえ相手が年下であっても、『さん』を付けるのが普通です。いいかなー？」

「うるさい！あんたも黙れ！どうなんだハギ！見たよな！」

僕は素知らぬ顔で黙り続けた。

「お前らどれだけ人を馬鹿にするつもりだよ」

教師が低くすこむ。

「あんたがうちの職員を馬鹿にしてるんだよ。のら教師」

田神さんが言い放った。

教師は言葉に詰まった。今更この教師が「ハギさん」などとは言い出せないだろう。どうするものかと、様子を見ていると。

「どこにも紐らしき物はないですよ」

木崎さんが手振りで床を示す。教師にとって矛先を変えるいい機会だったのだろう。

「とっくに回収したんだろ！」

再び興奮が高まった。

「あんたこそ、そんな動きをした子供なんて見ていませんよね？」

「こいつ……昔っからこういう所が気に入らなかったんだ。お前のような奴が学級崩壊させるんだよ」

「あの時のクラスが学級崩壊していたとは思いませんけど」

「俺が食い止めたんだろ！」

学級崩壊。最近あまり聞かない言葉だが、嘗て教育の現場で、深刻な問題として扱われたと読んだ事がある。

クラス内の子供達が誰も先生の言葉を取り合わなくなるといふ。めいめい好き勝手に振る舞い、席を立ち、おしゃべりをし、ひどい場合は授業が成り立たなくなる程だったそうだ。

「学級崩壊がどういうクラスで起こるか知っているか？教師がなまじフレンドリーな態度で接する場所できるんだよ！子供ってのはリーダーが必要なんだ。教師が指導力を発揮出来ないクラスでは、リーダーが子供の中から出て来ちゃう。そうすると、もう誰も教師の言う事なんか聞かなくなっちゃうんだよ」

「当時若かったあんたはそう考えて、いきがって、頑張ろうとしていたんだろうけど、結局はただの横暴な教師だったんですよ。だから誰もついて来なくなった」

「お前が周りをそそのかしたんだろう！」

「あんたの勘違いです。俺は何もしていません。……クセになるんですよ。威張り散らすのって。周囲をびくくさせて、自分に気を使わせて、感情のままに振る舞っていられる。最初のうちはご立派な考えがあったとしても、その内にそれが楽な事を覚える。他の接し方が出来なくなる。子供は、ちゃんとそれを見抜いて、そういうあんたに立ってついていたんですよ」

「こいつ……もういい！全員持ち物検査をするぞ！荷物を広げろ！」

話は、いきなり児童全てに飛び火した。

「キッズルームにして下さい。これ以上一般の方に迷惑をかけられない」

木崎さんが諦めたように、穏やかな口調で告げた。

児童書室の入口の人だかりはさらに膨れ上がっていた。放置出来る事態ではなくなって来ている。

「随分騒々しいですね。少しお静かに願えませんか？」

それらの人を分けながら入って来たのは犬養館長だ。もう一人、同年代のスーツ姿の男性も同伴している。見た事のない人だ。

「様子はずっとあちらで、興味深く拝見しておりました」

「あんたは？」

児童をキッズルーム内に促そうとしていた手を止め、教師は館長を見やった。

大物らしいと感じたのか、口調にやや大人しさが宿ったようだ。

「この館長を務めている犬養といいます。東小の児童の皆さん、今日はようこそ」

館長は子供たちを見回す様に挨拶をする。

「所持品検査は、やはり行き過ぎではないですか？」

「危険な振る舞いがあったんですよ。必要でしょう」

「その前にやるべき事を随分省いたようにお見受けしましたが」

「それはあなたの管轄ではない話と思いますよ」

感情こそ抑えながら話しているものの、不敵さは変わらない。

言葉を挟んだのは、横に立つ男性だった。

「領分をわきまえるというお話ですか？それも一理ですね」

笑顔で流暢な語りだ。

「誰だ？あんた」

この質問には、館長が言葉を引き取った。

「私の古くからの友人で谷村といひます。教育委員会に所属している男です」

教育委員会の名が出た事で、教師の顔に動揺が浮かんだ。

「呼んだんですか？」

「いえいえ、午前中にこちらの図書館の視察に、委員会代表が来ていたんですよ。谷村の顔を見つけたんで、時間があつたら昼飯でもどうかと私が誘いました」

「昼飯といつても、店屋物のかつ井ですよ。もう少し何か気のきいた物を食べさせてくれればいいのに」

「いや、かつ井と言つたのはお前だろう？俺は『何にする？』と聞いたんだから」

館長に反論されると、谷村さんは苦笑いを浮かべながら

「じゃあ今度はステーキでもお願いするかな」

「出前やつてる店にしてくれよ」

教師の顔に浮かぶ緊張感と、全く関係のない空気が二人の間に流れている。

「犬養と話してると、何の話だったか忘れそうになるよ」

「今それを言うか？」

眼前の事の成り行きに、教師は明らかに当惑し、立ち尽くしていた。

「さて」

谷村さんは姿勢を正した。

「所持品検査は、やり過ぎですね。もうこの子達を解放してあげてくれませんか？」
谷村さんに言われては管轄の話は通じない。教師に反論の術は無かった。

「図書館内ではお静かに願いたいのですが、いかがですか？」
これは犬養館長だ。

「分かりました」

氣勢をそがれた教師は、力無く頷いてみせた。

「私達はこれで引き上げます。いづれまた、どこかでお会いしましょう」

谷村さんの挨拶は笑顔で穏やかながら、静かな力が込められていた。

二人は背を向けて歩きながら、昼御飯の話の続きに取り掛かっていた。

「定食屋で嫌なら、最初から言ってくれば良かったんだ」

「いや、俺の軽口をいちいちそんなに真に受けるなよ」

「気にするだろ普通」

「じゃあ、正直に言うぞ」

「何だ？」

「あのかつ井、相当に美味かったぞ」

「何だ、気に入ってるんじゃないか」

「だから言ってるだろう」

やがて二人は入口に集まる人混みを抜け、向こうに消えた。

終幕を告げる圧倒的な空気の中、教師はもう何かを起こす力を失い、放心したように口を小さく開いていた。

「さて、借りて行く本はみんな決まったかな？」

田神さんが、児童に向かって声を上げた。

澤口さんが自動貸出機の横に立つて、操作法を子供たちに教えた。貸出カウンターには田神さんと木崎さんとがあたった。

何を選んでいいのか困っている子への相談、案内役を僕が受け持つ。

若菜さんは、午後はずっと児童に絡まない一般業務をこなしてくれている。

「カウンターがただ今大変混雑しておりまうす！二階カウンター、二階貸出機も併せてご利用下さ〜い！」
児童書室入口で事の推移を見ていた人混みが、一斉に動き出した事で処理が追いつかず、彼女は忙しかった。

図書館内にいつもの、静かな活気が戻っていた。

借り終った児童はエントランスホールに出るようにと、クラス委員が告げた。

そこで児童達はすぐに二列に整列し、並んだ所から順にしゃがんで待機している。

これまで抑えていたおしゃべりが一気に解放され、ホールは賑やかだった。

「これじゃあ二階から苦情が来かねないけど…今日はまあいっか」

田神さんの言葉は、誰もの思いだった。

望月君だけが本を決められなかった。

あの後、教師が彼からだけ、話を聞いたのだ。

「落ち着いて話を聞くだけだ。いいよな？」

野呂先生は、何故か木崎さんに了解を求めた上での事だった。

彼は、背中を叩いた事を素直に詫びた。けれど、それ以上の事は一切話をしようとしなかった。沈黙が長

引き、残り時間がなくなつた。彼は、借りる本を決めかねてしまった。

退出時、カウンター前を通ろうとした望月君に、木崎さんが声を掛けた。

木崎さんは彼の前に回ると膝をつき低い姿勢を作り、目の高さを合わせた。右手は少し考えるような仕草で顎にあて

「今度の日曜日に、本を借りに来い」

そう言った次に何か小さく不器用そうに口元を動かし、望月君の目をじつと見た。少しの間を置いて、望月君はにっと笑い、力強く頷いた。

子供たちが帰つたのは三時半頃だったろう。

口々に「お疲れ様」の聲が交わされる。

一般来館者の業務を一人でこなしてくれた若菜さんに、真っ先に「休憩してきて！」の聲が掛けられた。

「大変だったね、木崎君」

田神さんのねぎらいは、いつもよりずっと心がこもる。

「いえ、何か俺の方こそご迷惑をおかけしました」

責任の一端を自分に置きながら、木崎さんは頭を下げる。

「でもさ、実際あの時、何があったの？」

田神さんとしては、これはどうしても聞いておきたい事だっただろう。

木崎さんは困つたような笑いを作つた。

「のら教師が言っていた『紐』っていうのは本当に張られていたんだよね？」

あれだけ盛大に転倒したのだ。教師の勘違いとか、夢物語とは誰も思っていない。

木崎さんは素直に頷いた。

「それを見ている、あの騒動までは予想出来ないけどね」

田神さんもそこは分かっている。

「カウンターであたしと話をしている時に、木崎君は館内巡回に出ると言った。本当はあの時に、ホワイトボードが動いたのを見つけていたんじゃないの？」

田神さんの推測は当たっていた。僕がキッズルームに目をやった時、ホワイトボードは既に移動した後だった。

けれど、木崎さんはそれよりも少し前、ホワイトボードが動き始めた瞬間を見たのだそうだ。

『誰かがいる』と思ったものの、入口には女子児童が何人も立っている為、中まで見通す事が出来なかった。

「で、君は巡回に出掛け、敢えて左側の入口からキッズルームに入り、室内を確かめた」

キッズルームの中では、望月君がホワイトボードから、その反対側に向かって紐を張ろうとしている最中だったという。

キッズルームには壁の低い位置に、柔らかなカバーで覆われた手すりが付いている。子供がつかまり立ちを出来るようにという配慮だ。

望月君はその手すりに紐のもう片方の端を固定しようとしていた。

「あの子、意外と女子に人気あるのかもね。あの子たちはわざと自分達で壁を作って、教師に中を見せなくしていたでしょ」

申し合わせがあったとは思えない。それぞれが思いつきで呼吸を合わせていたのだろう。

「君は仕掛けを見て、どれくらい理解出来たの？」

「狙いまでは分かりませんでした。何かをやろうとしている。仕掛ける相手は野呂先生だ。視線の向きからそんな予想が出来る程度です。まだ紐も張りかけでしたから」

望月君とはそこで目が合ったそうだ。悪戯が見つかってしまった事で、彼ははにかんだ笑顔を作っていたという。

「で、放置する事にしたんだ」

木崎さんは気まずそうに頷く。図書館職員としてこの振る舞いは、あり得ない。

「俺が声を出したら、のらの怒りがこの子達に向く……そう思ったら、言葉が出なくなつて……あとはみんなが見ての通りです」

かつて無いような、少なくとも僕には初めての、騒がしい午後的一幕を木崎さんは「見ての通り」と言う。けれど、その言葉を信じていいのだろうか。

僕達は多分、今日の出来事の大切な部分を、まだ知らないままにいる……

どんぐり達の輝き（前編）了

参考文献

『どんぐりと山猫』 宮沢賢治／著 パロル舎 一九七九年

『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』 宮沢賢治／著 筑摩書房 一九八〇年

本の修理に関する描写は図書館勤務経験を持つ親族より取材させて頂きました。が、その文責の一切は筆者にあります。ご了承ください。

「山麓南町図書館物語」シリーズの 1 作目・2 作目は
以下の二次元コードから読むことができます。

1 作目



2 作目



どんぐり^{たち}達の輝き^{かがや}（前編）^{ぜんへん} — 山麓南町図書館物語^{さんろくみなまちとしょかんものがたり} —

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 ^{みづき} 瑞貴くぬぎ

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとし、また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

（前編・後編に分けさせて頂きました。この企画が次回無ければ後編は諦めます。）新人図書館司書の萩君は少しずつ仕事を覚えている毎日。そんな中、小学校から訪れた体験学習で大きなトラブルが発生。山麓南町図書館物語、第3弾です。

